

真山隼人／咲くやこの花インタビューvol.31

真山隼人(まやま・はやと)【令和3年度 大衆芸能部門 [浪曲]】



現役高校生浪曲師として一躍脚光を集めたデビューから、早 11 年。脂が乗り切った今が旬だよ聴き時だよと、再びの熱視線を集める芸人ひとり。その名は、真山隼人さん。昨年暮れに突然の大病に倒れてもなお、生死の境から不死鳥のごとく舞い戻ったご存じ、不屈の浪曲師とはこの人のこと。復活の狼煙をあげた東西での復帰公演では、ドキュメンタリー浪曲「闘病記～死んでたまるか」ほか2席で豪快にうなりを響かせ、万雷の拍手をその身に浴びた。“ひとり芸”を念頭に、真の隼人伝説はここからと奮い立った矢先に先に舞い込んだ「咲くやこの花賞」受賞の知らせ。念願成就、好機到来、千客万来の幕が開く。まずは喜びのコメント、次に自ら認める“オタク”ならではの切り口で、愛する浪曲の面白さや魅力を存分に語ってくれました。

◎取材・文・撮影：石橋法子

落語や歌舞伎好きの小学生が、深夜ラジオで浪曲と出会った。

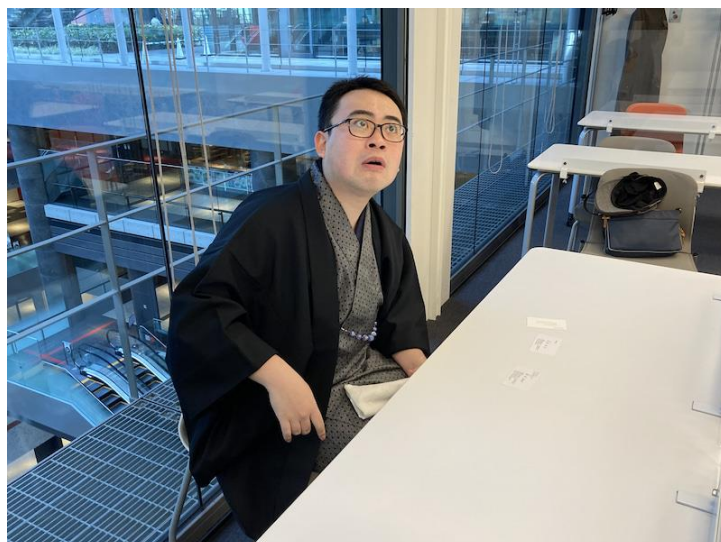
この度は「咲くやこの花賞」受賞及び、復帰おめでとうございます！！

ありがとうございます。受賞の知らせは入院中に聞きました。集中治療室でやっと意識が戻ってきた頃に治療室にある緊急の電話が鳴って、それに出た看護師さんから「隼人さん、権威ある賞を今回受賞されたそうです」「……紫綬褒章ですか？」「違います」。そこで(もしや、咲くやこの花賞か?)と思ったんです。それで「その緊急電話、貸してもらえますか」「ダメなんです。これは職員だけのものです」「でも何の賞か分からないのに…」とかやり取りしていく中で、咲くやこの花賞やというのが分かってああそうか、嬉しいなということがあります。



またとない状況での受賞の知らせだったのですね。

もう何にも考えられないぐらい、頭がぼーっとしているときにこの賞を頂けると聞いて、本当に嬉しかった。呂律も回らないし、どないしようかなと思ってたので。これがあったから早く退院できたところもあったと思います。それくらい、じつはずっと欲しかった賞でした。



入院中はリハビリのために始めた浪曲が、院内でも話題に。

まだ具合が悪かったんで「今日、10分間だけ浪曲をやります」と10分でおしまい。そしたら次の日に「あの～、申し訳ないけど、昨日の続きやってくれへんか」と昨日の人がまた来て、見たらギャラリーが増えてるんですよ(笑)。「あらすじは言いませんけど」とか言いながら、2日間に分けて1席の浪曲をやったりしました。

そんな浪曲との出会いは、小学生の頃までさかのぼるそうですね。浪曲は節(うたのような部分)と啖呵(せりふ語りのような部分)を織り交ぜつつ、古今東西のドラマを物語る明治期より発展した大衆芸能です。一般的に曲師(三味線)との掛け合いで魅せる芸能でもあります。

小学生の頃からラジオが好きで、夜中に色々な番組を聴いてたんですよ。(立川)談志師匠の番組とか「ラジオ深夜便」とか。その中の一つの番組でたまたま浪曲を聴いて、あれは10歳ぐらいでしたかね。落語でもない、講談でもない「何やこれ？」と。三味線が入って語りも面白いし、浪曲ってどんなんやろうと図書館で調べ始めたら、やってる人も結構いると分かって。レコードを買って色々聴いたりしているうちに、いっぺん生で観たいなと思ったんです。

偶然、地元三重のスーパーで、名人会のチラシを目にされて。

落語は結構地元にも来てたんですよ。(春風亭)小朝師匠や笑点メンバー、(桂)米朝師匠・米團治師匠・文枝師匠らあのへんがバーッと来てはるんで、それは観に行ってたんですけど、浪曲はないなど。さてどうしようと思っていたところ、近所のスーパーでチラシを見つけて。当時の名人7、8人が出る会で、じつは毎年名古屋で会をやってたんですよ。それが平日の昼間の会でした。

小学生には厳しい時間帯ですね。

ただ失礼ですが、どう見ても僕が大人になる時までに、この方たちはいないだろうと。当時で80歳ぐらい。実際に今半分以上の方はお亡くなりになられているので、観ておいて良かったなど。最初は親に行きたいと掛け合ってもダメの一点張りで。仕方ないなと朝テレホンカードを握りしめてて学校へ「行って来ます」と出かけました。で、駅前の公衆電話から「隼人の母ですけど」と学校に体調不良で休ませることを伝えて、ガチャッと電話を切って、そのまんま駅のロッカーにランドセルを放り込んで、名古屋まで電車で行ったんです。

ええっ、行動派ですね！ 先生にもうそがバレずに。

学校の先生をダマして、これは悪い小学生でしたわ(笑)。それまで保険とか化粧品のセールスマンがよく

電話を掛けてきて、相手して遊んでたんですよ。「お母さまでしょうか」「母と言えば、まあ……。どういったご用件でしょうか」。まんまとダメされるんですよ本当に、これはイケるなど。



(笑)。小学生にとっては劇場という空間も敷居が高そうですが、そこは落語の寄席に通った経験が活かされて？

それはありますね。ただ浪曲の会場というのは、寄席とはまた違ったムードを持っているんですよ。「あんた何で来たんや」「観たくて」「そうか」で切符を買って座って観ました。初めて観たときはやっぱり凄かったですね、生の浪曲というのが。客席にいるおじいさん、おばあさんたちが、その浪曲師たちと共に時代を過ごしてきたんですよ。「ああ、ええな」「またあれが聴けて良かった」と、拍手してたりする。ああ、すごいな。こんな世界があるんだと思って。7人の最後まで観ると、学校さぼったことがバレるから、最後のひとは観ずに帰って。その最後のひとりが、後に大師匠になる初代真山一郎だったんです。その後も2回ほど観に行き、やっぱり昼の部のトリは真山一郎なんです。結局観られず終いでした。もし観れてたら、その場で楽屋に弟子入りに行ってたかもしれないですね。

その言葉通り、聴く専門から数年後には浪曲界に入られました。

通い始めて2年後ぐらいからパソコン使えるようになって、いろいろと調べてたら東京の方ですごい若いひとが浪曲界に入って、もう前座として修業してるとあった。「こんな世界に飛び込むひとが20代でいてるんや」「こんな生活できるのかな？」と色々思ってた、そのひとがいま東京で活躍されてる玉川太福さんです。太福兄さん入った時は丸坊主で「若い人がこんな世界に入って大丈夫なんか？」とインターネットで見ながら思っていました(笑)。まさか自分も数年後に同じことになるとは思わずに。

演歌もポップスも、歌は短い物語のある浪曲と一緒に思う。

隼人さんは2010年に真山広若(現・二代目真山一郎)に15歳で入門。2015年から真山誠太郎門下に移籍されました。



中学2年生の時に当時の真山広若、いまの二代目真山一郎の浪曲を聴きました。初代譲りの三味線じゃなくてオーケストラでやる演歌浪曲。三味線の手を全てオーケストラの譜面におこして、それをカラオケで流して三味線とやるのと同じようにオーケストラでやるっていう。うわ、すごいなこれとは。この時「演歌浪曲やりたい」と密かに思ってたんです。学校では、文芸や歌舞伎の本は好きで読んでたんですけど、成績はあまりよくなかった。読んでると、学校の先生にも塾の先生にも友達にも言われるんですよ、そんなん読んで、賢いと思わせても無駄やでと。中学生になると学歴だけがものを言うような感じやったんで。いやいや僕は好きで読んでるのに、あんたらと同じ土俵でもの言うなと内心思っていました。

「これや！」という好きの気持ちを買かれた。

これはやりたいと、師匠は大阪に住んでらしたので、三重からならそんなに遠くないぞ、知ってる土地やしいけるなと思って。中学校卒業して親には「ファンレターを書く」とダマして師匠宛てに「弟子にしてください。次はこの会に行こうと思ってます」と書いて出して。高校の入学式が済んですぐのある夜に家の電話がリンと鳴って母親が出た。「真山広若の家内ですが、お宅の息子さんが弟子入りしたいそうで」「はあ」「まあ一回来て貰えますか」「はあ」。ガチャ。大問題ですよ(笑)。「弟子入りってなに?」「や、僕やりたいと」「あんたせっかく頑張って高校受かったのに、高校どうするの?」「ささ、そこですもん」と。

ご自身としては、高校は辞めるぐらいの覚悟でした。

5月に師匠が出る会を大阪の文楽劇場に親と一緒に観に行き、その場で「弟子入りさせて頂いてもよろしいでしょうか」と伝えました。その時師匠に言われたのが「結局お前ものにならんかった時に中卒じゃアカンから、悪いけど高校だけは通ってくれ。仕事のない時は高校に行ってくれ」と。で、高校行きながら浪曲の修業を始めました。親には何も言われませんでしたね。落語じゃなくてええんかとは言われましたが。いや落語も好きやけど、浪曲がえんやと。ほな、好きにせえと。



落語好きのエピソードとしては、小学生の頃にお年玉をはたいて、六代目三遊亭圓生師匠の CD セット「圓生百席」を買われたとか。

そうなんです。「圓生百席」がその当方で 20 ウン万円ほどしました。118 枚か 119 枚入ってて、これ聴けるかなと。まだ全部は聴いてないので、いまも一枚一枚夜中に聴いてるんですけど。でもやっぱり僕は浪曲の方が身に合ってますし、好きですね。

同じ話芸の落語や講談と比べて、浪曲の違いのひとつに歌があると思います。隼人さんは、歌そのものもお好きですか？

最近聴いてないですけど、演歌は好きですね。浪曲は口語という意味で大衆性のある文楽の浄瑠璃みたいな感じ。結局良いとこどりですよ。語って歌う、これは面白いなと思って。三味線の浪曲はいつかできる可能性はあるやろうな。ただオーケストラの浪曲は真山一門に入らないと絶対にできない。そう思って入ったのが 15 の春でした。

演歌はどんな部分がお好きですか。

結局、浪曲が流行らなくなっていた昭和 30 年ごろに盛り上がってきたのが演歌で。「この先仕事がない」ぞと浪曲師たちが歌謡業に流れて行った。村田英雄、三波春夫、うちの大師匠の真山一郎も『刃傷松の廊下』という歌ですごいヒットしたんですよ。僕はやっぱり歌は短い物語のある浪曲だなと共感するところがあります。それは演歌に限らず、やってることは何ら変わらない。物語を歌に乗せるのは面白いっすよね。

ハマったらとことん！ “自分の型”に目覚めた宝塚歌劇との出会い。

歌と物語で想起するのがミュージカルです。じつは隼人さんは宝塚歌劇団のファン歴も長く、かつて轟悠さんの熱心な追っかけをされていたそうですね。きっかけは？

大師匠の『雨月物語』を受け継いだ時に、自分でも上田秋成の本を読んで書いてみたり古い昔の浪曲でやっていたやつを頂いたりと、とりあえず旧作全部やってみようというのが今の目標なんですけど。2011 年ぐらいかな、大師匠とお会いしたときに『雨月物語』やりたいんかと。わしがやり始めた時に宝塚で『雨月物語』（『浅茅が宿ー秋成幻想ー』98 年雪組）をやってるはずやから、ビデオ取り寄せて見てみろと。歌劇専門のお店で調べて買って観た。そこで出てたのが轟悠さん。「すごいなこのひと！」と、そこから買い漁って観ていくうちに、どんどん僕の中で「轟悠さんすごいな」となっていく。でも見始めた当方で 12、13 年前の映像やったんで、もうこの人は退団していらっしゃるだろうと。でも一辺宝塚のサイトを見てみようと、ネット開いたら「ん、専科？」というのがあって、真ん中にボーンと轟悠の文字が。え、まだやってるの!? 「これは！」というので色々観に行くようになりました。なんてかっこええんだと。ちょうど自分の身辺でごたごたがあった時期と重なって、浪曲が嫌になっていた時に、ちょうど宝塚が 100 周年で轟悠さんがレット・バトラーで出ている舞台『風と共に去りぬ』を梅田まで観に行っ。そしたら次の年に名古屋の中日劇場にも来て、当時まだ三重に住んでたのでこれは近いからと 16 回観ました。

16 回！！



もう向こうのホールスタッフも「またあいつ来てるで」と。後ろの方で観たり、1列目で観たり。やっぱり16回も観るとアホになりますね(笑)。例えば南北戦争の話でも、刀をピストルに持ち替えただけで『ベルばら』と一緒に、轟さんのバトラーがぱっと見得をね、見得って言わないんでしょうけど、ぱっと見得をきるところでわーっと拍手が起こるわけです。そこで10回目観た辺りから率先して拍手したり。(きっかけを)知ってるから、ほんとにアホですよ。

小学生の頃はご年配に交じて浪曲に通い、成人してからは女性に交じて宝塚歌劇にハマって。客席ではいつも、圧倒的少数派の存在だったのでは？

今でこそ宝塚の客席にも男性の姿は結構目にしますけど、僕が行き始めた10年ぐらい前までは、そんなにいなかったですね。休憩中のトイレは優越感に浸ってました。女性が長蛇の列で並んでいる中、僕観に行った時で男性は3、4人ぐらい。ふっと横見ると植田紳爾先生(元歌劇団理事長)や、山村友五郎先生(日本舞踊・山村流六世宗家)だったことも。内心「用たすどころじゃない！」に(笑)。本当に宝塚の舞台というのは、精神的にも助けられますよね。

もとは浪曲が繋いだご縁ですね。ミュージカル観劇が浪曲の活動に影響を与えることも？

ありますね。『ベルサイユのばら』でも『風と共に去りぬ』でも外国の話ですけど、これは歌舞伎の所作やぞというのがあったり。植田先生が創るものを“植田歌舞伎”と称する人があるように、観ながら僕がやる時にもこういう型はあるなと思って、取り入れたり。三味線でやるようになってからこれはずっと考えていたことなんですけど、浪曲というのはやっぱり「一人一芸」なわけですよ。僕がやるのは古典芸能ではなく、あくまでも大衆芸能。師匠のまねはある程度はしなくてはいけないですけど、そのままの九官鳥ではダメなんやと。やっぱり自分の型、自分にあった浪曲というのをやらないといけないんだ、という気持ちの部分に繋がっていたりしましたね。

ひるがえって、師匠から一番学んだと感じる部分は？

「まず芸磨く前に、人間性磨かな失敗するぞ」ということ。悪い人間やったら、どこかしらで悪さが出てくる。お前若いんやから、ちゃんとやれよという教えは、未だに自分に鞭打つ言葉としてありますね。今のあかんかったんちゃうか、これあかんかったんちゃうかと、まず考えてやるようになりました。今回の病氣してからは特にその思いは強くなりましたね。

藤山寛美のような朗らかな浪曲と文芸作品の2本柱が隼人流。

「一人一芸」で言えば、10年選手となられた隼人さんの一番のうりとは。

今の誠太郎門下に移って三味線でやるのを許してもらってからは、あんまりないケースなんですけど、本当に色んな師匠方に教えて頂いたんですよ。自分でも浪曲マニアなので勉強のためにテープ、レコードも集めて聴きますし。色んな浪曲を聴くと、「このひとはこれ！」という、芸名を超えた本名レベルでの色が、その時々名人や上手と言われる人たちの浪曲には表れていたりする。明治、大正、昭和初期ぐらいの浪曲って本当によせこせで、自分を作った先人たちがばかりやった。僕は去年の10月に倒れたことで、自分自身を振り返る中で「ほがらかで楽しく、それでいてホロっとさせる」藤山寛美先生みたいなものをやりなと、目指して取り組んでいます。それと文芸作品を浪曲にすること。上田秋成『雨月物語』、中島敦『山月記』、川端康成『伊豆の踊子』とかやりたいなと。今はこの2本柱でやっています。古い台本を色々入手して、昔のものなので戦争カラーが強かったりするんですよ。そこを自分で洗って、ただの人間ドラマに仕立て直したいなと思ったり。



時代のフィルターを取って、ドラマの部分だけを抽出する。

男尊女卑であったり、めくら、つんぼ、そういう言葉とかも直したりで。自分らしくやろうと頑張ってます。

“オタク”という要素はひとつ、隼人さんの強みであり個性であると感じました。浪曲はもとより落語、歌舞伎、宝塚歌劇、文芸作品まで。好きが講じて蓄積された知識や経験が、独自の切り口をもって、浪曲というひとつの表現に落とし込まれていく。懐かしくも斬新な隼人さんならではの話芸への期待が高まります。

歌舞伎も好きなので、所作をやる時も(片岡)仁左衛門さんになったつもりでやり切るわけです。で、後からテープ見直して「これ、仁左衛門さんちゃうな」と思ったり(笑)。そうやって歌舞伎からも取る。同じように浄瑠璃からも文楽からも学ぶところはやっぱりあって。そもそもどうして浪曲は「一人一芸」というと、昔は母体が凄かったわけですよ。全盛期は東西で浪曲師が5千人ぐらいいたと思います。名人から末端まで、全員が自分自身の声の出し方というものを発見しないといけな。師匠のまねをするというのは重要

なんですよ、型として浪曲を覚えると言う意味でも。ただ僕と師匠では体つきも声つきも違う。ある程度脱却しないと、自分の声じゃないと思うわけです。



「自分の声とは何か」。

そう思っているときに浄瑠璃を観た。(人間国宝で文楽太夫の豊竹)咲太夫師匠が「おお～」と喉を開いてやっていた。なるほど、これやと。で、浪曲のビデオを見たら凄いだみ声の名人のお師匠さんも咲太夫師匠と一緒に、わーっと喉の奥まで開いている。かと思っ、大師匠の初代真山一郎のビデオを久しぶりに見返したら、先生は澄んだ高い声で「は～」とやる人でしたが、でもやっぱり喉の奥までばーっと開いている。ああ、やっぱり。よく喉は締めるな開けい言うのは、なるほどなど。今になって好きで見て来たものが資料となって繋がってきてますね。

それにはやはりある程度の時間も必要で。そういう意味でも知識と実力が備わった今からの活動が、ご自身でも楽しみなのでは？

そうです。休んでリハビリする中で、もう一回テープを聴き直してみました。例えばうちの大師匠が初めて録った26歳のものから晩年の最後のものまで。年代順に聴き比べたら、ああなるほど、声の出し方も同じようできて案外違ってるな、みたいことが分かってくる。他にも、初代の京山幸枝若名人の若い頃から晩年までのテープを聴いてみたり。ネタの選び方、声の出し方、自分の身体の具合の悪さをどうカバーしているかとか。今までは浪曲を聴いても「こういうネタがあるんや」ぐらいでしたけど、今回俯瞰して浪曲を聴いてみたら、えらい奥が深いなと、やっと今繋がったというか。色んな人に病氣したり、死にかけたりしたら強なんぞと言われたのが、ホンマにそうなんかなと思ってますね。テープ集めてたのも良かったし、いま研究の真っ最中なんですよ。

年齢や状態など、その時々に見合った浪曲との向き合い方や声の出し方、演目までがあるのですね。

やり方が少し違ったというのもありますけど。昔は明治以降の話がうりな人、江戸時代以前の話がうりな

人など、色んなジャンルがあったわけです。母子もの、武士ものの忠臣蔵とか。いまは人が少ないですから、そんなこと言うてられないですよ。僕は任侠もの以外は何でもやります。「ほがらか」に当てはまるものだったら何でもやります。

曲師の沢村さくら姉さんと一緒に切磋琢磨して頂けた賞です。

これまで集めてこられた資料は、見事に整理整頓されていそうですね。

自分で書くときは原稿用紙にまとめて本にして、文楽の床本みたいな感じにして棚に入れてあります。倒れて入院している時に、鍵も電話もすべて渡していた(曲師の沢村)さくら姉さんに台本を持って来てほしいと頼んだんですけど。「どこにある?」「あの棚の上から何段目の何冊目と、隣の棚の上から何段目の何冊目のやつ」。次の日持って来てくれたさくら姉さんが「ほんまに、言うた通りのところにあったわ!」と。母親も家に泊まったらしく「掃除したよ」「資料さわった?」「さわってないよ」。退院して見たらちょっと違ってらるわけです。「さわったやろ」「いや、ごめん」。その辺の整理はきっちりやってます(笑)。



さくら姉さんこと、曲師(三味線)の沢村さくらさんと一緒に組まれるようになったきっかけは?

僕は演歌浪曲をやりたくて始めた人間なので、最初は三味線の浪曲をそこまでやりたいとは思ってなかったんですけど。入って1、2年目ぐらいの時に藤信初子師匠という、初代の京山幸枝若師匠のを弾いた名人級も名人のお師匠さんに呼ばれて、「浪曲の基本は三味線やから、三味線やらなあかんで。私どこでも弾きに行っただから」と言われて。「ええーっ!?!」ですよ。幸枝若師匠のを弾いていたような方から「私あんた専属でもいいで。稽古もどこでも行っただから」とまで言って下さって。これは凄いことなんです! 僕も頂いた年賀状をいつも机の目につくところに飾っていたぐらい大好きな方だったんですけど、修業中でも

あり結局ダメで叶わなかった。その時の思いもあり、三味線でもやりたいなと思い始めて。

その頃、さくら姉さんは復帰した幸いってん兄さんと2人で回り始めていて、僕もかばん持ちでついて回ってたんです。そばで見てたら楽しそうなんです。さくら姉さんは「お兄さん、こうした方がもっとええで」と励まして、兄さんもその励ましによっていいところまでいったんです。その後また体調を崩されて、辞められるんですけど。2人の姿に「ええな、こんな感じでやりないな」「この人とやりたいわ」と思うようになって。うちの大師匠とか、昔の看板の師匠というのは、この浪曲師にはこの三味線とというのがあったんですよ。移籍の話が出た頃に、さくら姉さんとは仲良くしてもらってたので、ご飯食べに行ったりしながら話して、一緒にやってもらうことになりました。僕がさくら家のそばに引っ越したのでこれは一種の強みですよ。テープで練習するよりも、互いに相談し合いながら練習できるので。尻叩いてダメ出しもしてもらって、口演にもあのときの幸いってん兄さんみたいに、またそれ以上に一緒にぐるぐると回ってくれて。この人以外ではやらんぞという今の感じになりましたね。

口演を聴くと、三味線も奥深い複雑な音色を奏でていますよね。

3弦しかない中で、面白い手は入ってますよね。浪曲の三味線は浪曲師がば一つと語るのに合わせて、やっぱり尻を推して物語に突っ込んでいく三味線じゃないと。遅れてベタベタと、後ろに引っ張っていったらダメなんです。あの沢村さくらさんがいるから今回の「咲くやこの花賞」も頂けたなと思っています。本当に二人で頂けた賞だなと、嬉しいことです。やっぱり一緒に切磋琢磨して来たから。先輩に対して失礼かもしれませんが、僕はその気持ち。無くてはならない人ですね。

色んなひとに気楽に楽しんで貰って、最後に熱い思いを届けるのが浪曲です。



浪曲のこれからについては、2017年の朝日新聞の連載「新編 上方風流」のゲストとして浪曲界の現状を「風前の灯」とコメントされていました。当時の思いと現状は？

あれは怒られました。でも実際に当時の浪曲界は、風前の灯やという思いでした。浪曲自体は大丈夫やでと。今でもホームセンターに行ったら(二代目広沢)虎造全集が置いてあったりするし、言うても人気がある。ただ浪曲界は人が少なかった。でもあの後に若い人が増えました。いま浪曲界全体を見回すと東西合わせてあの時よりは、未来が見えたのではないかと思います。僕はたとえ自分一人になっても「やるぞ！」というぐらいなんですけど。でもやっぱり浪曲界が盛り上がってくれた方がやりやすい。志すひとが増えて母体増えたら嬉しいなど。当てもみんなで盛り上がっていかれたらと思っていました。

ご自身のモットーとしては、浪曲を「カジュアルに」との思いもあるそうですね。

例えばいま『忠臣蔵』を語るにしても、それが映画なら新たに脚本を書くじゃないですか。そういう感じで浪曲界でもやっていけたら、『宮本武蔵』にしろ『忠臣蔵』にしろ、僕がいまやるなら新しい台本を書きますし。古いものを直してやるのもいいんですけど「伝統芸です」といってやるのは違うかなと。これは浪曲の面白い所で、浪曲は明治時代に発生してその当時書かれた台本は、やはり日露戦争を背景にしたものになっている。昭和20年後半はGHQによる言論統制の台本であったり、昭和40年代は民謡とかが台本になっていたり。その時々思想などをモチーフにして書かれてるんで、なかなかこれを伝統化するの難しい。「お国のために死んで来い」と今やるのはええのか、僕はそれは嫌やと。

浪曲というのはカジュアルに、古い話でも洗ってやる。伝統芸能である歌舞伎にも「仁左衛門監修」とか「スーパー歌舞伎」とかありますし、それなりに洗ってやっている。洗ってやるから伝統芸能でも革新的。浪曲はそもそもが、よせこせでやってるので、そのまま伝統としてやっても荒が目立つわけですよ。やっぱり歌舞伎や浄瑠璃、能狂言に負けてしまう。だから僕はカジュアルに、もっとラフに浪曲をやる。忠臣蔵でも伊達騒動でもなんでも古い話も洗ってやれば、そんなに難しい話やないんですよ。

それこそ落語や宝塚歌劇を楽しむように、浪曲にも気楽に親しんで欲しいと。

宝塚を観に行く人って、たまにえらい古い演目やるなと思って、ああなるほど、普通に下調べしたり、例えばパンフレットひとつとってもあらすじが書いてあったりするの。浪曲でもすぐコンパクトにあらすじを言うようにしてるんです。何々さんと、何々さんが対決をしますよと。

初めて聴く人が楽しめて、かつツボを押さえた台本で玄人さんも飽きさせない。両方に応えたい思いも？

それはありますね。でも明治から最近まで本来浪曲というのは、何も言わずに「一席聴いてください。何々です」と名乗って、後は声の力だけでおしていく。これが本来の浪曲の魅力やったんです。でもいまそんな

感じじゃなかなか難しい。話としてまくらがあつて、あらずじもあつてとやってますね。玄人というか、色々なひとに楽しんで頂けるように自分なりに考えています。

もし興味はあるけど一歩が踏み出せないという方がいたら、何とお声掛けされますか？

もう気楽に、人間同士が、たまに馬が出て来て喋ったりもしますけど、そこでの楽しいほがらかなあつけらかんとしたやりとりを楽しんで貰って。ただその中でやっぱり芯のある人間ドラマを(藤山)寛美先生の芝居と変わらないものと思っています。先生が演じるあほっていうのも、最後には「俺はこうなんだ！」っていう熱いものが出てくる。熱い思いを届けるというのはなんら浪曲とやってることは変わらない。そういう思いもあって、寛美先生のご寄付をもとにした基金を活用して創設されたこの「咲くやこの花賞」というのはずっと欲しかった、頂けたらええなという思いでした。やっぱり大阪でやってて尊敬する先輩方もたくさん獲られている賞なので。僕にすごく影響を与えて下さった方々と一緒に、その末端に並ばせて頂けるのは幸せなことですね。



後に恒例の質問です。隼人さんが名物として「咲くやこの花賞」を贈呈したくなる、大阪の好きなところを教えてください。

上方芸能が根付いている“はんなりした時間”ですね。東京がぐわーっと時間が進んでいくのに対して、大阪は同じ都会やけど時間がはんなりと進んで行く感じ。これがええなと。この時間の流れがあるから上方

芸能の文楽や歌舞伎、漫才や浪曲、落語、講談、諸芸もあるして、住み良いええ街やと思います。天王寺
界限も住んでて楽しいですね。はんなりした時間が、僕の思う大阪名物ですね。



【略歴】真山隼人(まやま・はやと)

1995年3月10日生まれ、三重県鈴鹿市出身。2010年に真山広若(現・二代真山一郎)に十五歳で入門、平成生まれの浪曲師第1号となる。高校在学中の2011年に一心寺門前浪曲寄席にてデビュー。2012年に国立文楽劇場「浪曲錬声会」初出演。2015年に真山誠太郎門下へ移籍。2016年に真山一門では実に31年ぶりとなる三味線浪曲を復活。2018年に大阪国立文楽劇場にて初の独演会を開催。2019年より東京・浅草木馬亭にて初の独演会、以後年一回開催中。2020年はコロナ禍に企画・販売した「超お手製CD」(第1弾～第6弾)が約1,200枚を売り上げ大ヒット。2021年3月に始まった此花千鳥亭の落語講談浪曲のバラエティ席「水曜千鳥亭」メンバーとしても活躍中。

【受賞歴】

2013年「第12回三重県文化賞新人賞」、2018年「第73回文化庁芸術祭大衆芸能部門新人賞」

【公式HP】 <https://roukyoku8810.com/>